

【解答例】

一

問一 A＝ニ B＝ロ C＝イ D＝イ E＝ハ

問二 ロ

問三 目当ての品を入手できるか否かを運のみが支配する「ガチャ」に人生をたとえることは、本来は外部からの支援など様々な要素で動かさうる人生が出生時の家庭環境のみで決まるものとみなされていることを意味するから。(100 字)

問四 社会制度の改善や社会的連帯の可能性を考えず、出生時の条件で人生の全てが決まることを自明視する人間観。(50 字)

問五 イ＝× ロ＝○ ハ＝× ニ＝○

問六 a＝依拠 b＝媒介 c＝諦

二－A

この問題は、著作権の関係により掲載できません。

【解説】

□〈出典〉 戸谷洋志『親ガチャ』と自己責任論（『現代思想』（青土社）2024年4月号掲載）

〈問題文〉 「親ガチャ」という言葉について論じた文章。「親ガチャ」は、出生時の家庭環境という「運任せ」のもので人生のすべてが左右されてしまう、という人間観を示す言葉であり、家庭の外部からの支援や他者との連帯の可能性を考えずに、すべては「自己責任」だと思いこんでしまう時代精神を反映している、と述べています。

〈設問〉 問一 Aは前の「カプセルトイ」と直後からの「人間」が「同じ構造を持つ」という文脈。Bは前が「……は、普遍的な事実」後が「……は、普遍的な事実ではない」で〈逆接〉。Cの直後「すなわち」は前後イコールを示すので「C『宿命論』＝「……偶然によって与えられる」……必然的に決定されている」という対応。Dは直前「限定……でもなければ……短期的……ではない」をうけるので、「より広く、かつ深く浸透」のイ。「時代精神」はニ「原理」とは異なります。Eは「……頼ることがE」が「……頼ることは醜悪なこと」に対応。

問二 【Ⅱ】の前で「社会を頼らない」のが「人生の美しさ」だというサッチャーの主張が述べられるのを受けて、脱文「それでは、なぜ、社会を頼らないことが美德とされるのであろうか」と、その〈理由〉を述べるつながり。

問三 傍線①『親ガチャ』という言葉が成立している」のは「どんな親のもとに生まれるのかは運任せ」で「家庭環境によって人生を左右される」のだという考え方が「カプセルトイ」の「ガチャ」と重なるから。傍線①「そうした家庭環境の外部からの可能性……」は、前段落「家庭の外部から必要な支援を受けることができるなら、家庭環境の影響は相対的に減じられる」はずなのに、それが「信じられてない」から〈家庭環境の影響がすべてだ〉つまり〈「運」しだいの「家庭環境」のみに「人生は左右される」〉と考えるようになってしまう、ということ。これと重なる「ガチャ」の特徴を傍線①の三段落前から加えてまとめます。

問四 （前段落までで述べられた）「若者」だけでなく、「より広範な年代に共有されている人間観」とは〈時代・社会全体を覆っている考え方だ〉ということ。これは、次段落「特定の世代に限定される……短期的（な）……ものではない……何らかの『時代精神』……に根差している」に対応します。その「時代精神」は端的に言えば「自己責任論」。次段落「社会的な連帯への希望を持つことができない」あるいは最後から2段落目の「国家から社会保障を求めない」（つまり、本来「社会制度の改善によって解決されうるもの」（傍線①の次段落）なのに、そうしようと考えない）社会の風潮が、〈生まれた後からはどうにもできない〉という考え方を生んでいるというのです。

問五 ロはサッチャーの言葉の中の「私たちの人生の美しさは……どれだけ自分自身への責任を引き受ける覚悟があるのか、またどれだけ自らの努力によって不幸な人々を助ける覚悟があるかに、かかっている」に合致。ニは空欄Bの段落に合致します。イ「新語大賞に選ばれたから」つまりそれが理由で「普及した」のではありません（むしろ「流行」したから「新語大賞に選ばれた」という因果関係のはず）。ハ「新型コロナウイルスの感染拡大に乗じて」（その機会を利用して）でなく、「二〇一〇年代後半以降に……普及した」（1段落）とあります。

問題文は著作権の関係により掲載できません。

設問についても、その中で言及している問題文については同様の扱いとなります。したがいまして、どのような問題がいくつあったかについてのみお知らせいたします。実際の設問とは異なる順序となりますのでご承知おきください。

- 1) 問題文中のある個所についての説明に相当する箇所を抜き出す（記述：1問）
- 2) 問題文中のある個所について、正しい説明を選択する。（マーク：1問）
- 3) 空欄補充（マーク：4か所）、（記述（問題文中から抜き出し：1か所））
- 4) 語の意味について正しいものを選択する。（マーク：1題）
- 5) 問題文中の言説について、その理由を記述する。（記述：1題 90字以内）

■令和 7(2025)年度学習院女子大学一般選抜・古文 解答例・解説＜A 方式＞

【解答例】二-B（選択問題 古文）

問一 a = イ b = ハ c = ハ d = ロ

問二 ① = ロ ② = イ ⑥ = イ

問三 見たいと思われました。

問四 春

問五 女君の、絵に気を取られても、油断して顔を隠す扇を手放したりしない、嗜みのある性質。

問六 女君の美しさに及ぶことはできなかつただろう。

問七 ニ

【解説】

〈出典〉 『夜の寝覚』（中古の物語）

『夜の寝覚』は平安時代に成立した作者未詳（一説に菅原孝標女）の作り物語で、源氏の太政大臣の次女である寝覚の上の数奇な運命を描いています。『源氏物語』の影響が強く、『源氏物語』の垂流と言われることもあります。出題したのは、帝がかねてから気にかかっていた寝覚上の姿を垣間見て、そのあまりの美しさに心を奪われる場面です。垣間見は、男女の劇的な出会いを演出する舞台装置で、物語にしばしば採用されます。『源氏物語』の若紫巻の、光源氏が幼い紫の君を垣間見る有名な場面など、皆さんも高校の授業などで触れたことがあるのではないのでしょうか。やや読みにくい箇所は含まれますが、想像力を働かせながら読めば内容は十分に読み取れるはずです。

〈設問〉

問一（語句の意味）

- a 「こころそらなり」は何かにかげられて何も手に付かない様子を表す形容動詞で、「上の空だ・無我夢中だ」などと訳します。大皇の宮に垣間見をそそのかされて気もそぞろになった帝の精神状態を表しています。
- b 「こころもとなし」ははやる心をおさえかねる様子を表す形容詞で、「もどかしい・待ち遠しい・気がかりだ」などと訳します。ご灯火（＝「御殿油」）の光がかすかで部屋の中がよく見えず、じれったくなるほどだということです。
- c 「おろかなり」は「いい加減だ・疎遠だ・不十分だ」などと訳す形容動詞で、「言へばおろかなり・言ふもおろかなり」の形で、「（～と）表現したのでは不十分なほどだ・言葉では言い尽くせないほどだ」の意を表す熟語となります。女君の美しさが筆舌に尽くしがたいものであることを表現しています。
- d 「つきなし（付き無し）」は物事がうまく調和しない様子を表し、「ふさわしくない・似つかわしくない」などと訳す形容詞です。dは大皇の宮の発言に含まれていますが、大皇の宮は、女君の姿が帝によりはっきり見えるように、女君を灯火の側に呼び寄せようと考えています。それで、灯火のそばに置いた長恨歌の絵に興味を引こうと、自分も年甲斐もなくこの絵には心引かれてしまうと述べているのです。

問二（主体判定）

- ① 傍線部直前の「入り居させたまひにけるも」の主語が「上も」であることをまず押さえましょう。その上で、帝が女君の姿を垣間見ようと御帳の内に入り込みなされたのを、「いかでかは知らむ」（どうしてわかろうか、いや、わからないだろう）というつながりになっていることをつかんで下さい。なお、傍線部①には女君への敬意を表す尊敬語が用いられていませんが、本文中では女君に対してほとんど敬意が払われていません。これは、語り手が帝に寄り添っているからだと考えられます。
- ② 傍線部「いみじと御覧じしませたまふ」は、「すばらしいと心に焼き付くようにご覧になる」などと訳すことができます。内容から考えても動作の主体は女君の姿に心を奪われている帝でしょう。「御覧ず」が「見る」の最高敬語、「せたまふ」がいわゆる二重尊敬で、動作の主体に対する最高度の敬意を表していることにも注意して下さい。
- ⑥ 少し見えにくいですが、15 頁の 2 行目から、「(女君の) あたりにほひ満ちたるさま(を)、 「〜」 と、(帝は) 御覧じ入るに、(女君の) 絵に心をば入れたれど、〜さまなど(を)、 「〜」 とぞ、(帝は) おぼし知らるる」というつながりになっています。やはり女君の姿に帝が心を奪われているさまが述べられていると考えられます。

問三（現代語訳）

「ゆかし」は「心引かれる・見たい・聞きたい・知りたい」などと訳す形容詞で、「直前の「かやうの物」が長恨歌の絵をさす」と説明がありますから、ここは「見たい」でいいでしょう。「おぼゆ」は、「(自然と) 思われる・思い浮かぶ・思い出される」などと訳す動詞です。むやみに「思う」と訳さないようにして下さい。「はべり」は丁寧語の補助動詞で、「〜です・〜ます・〜ございます」などと訳します。「し」は過去の助動詞「き」の連体形で話者自身の体験を回想する場合に用いやすいことに注意しておきましょう。訳は「〜(し) た」でかまいません。

問四（古文常識）

季節を考えると、陰暦の何月か、あるいはこういった季節の風物が話題となっているかなどに着目しますが、貴族女性の衣服の色目や模様なども、季節を推測する手がかりになることを覚えておいて下さい。季節にあった色目・模様の衣服を身につけてこなすかが、貴族女性のお洒落の一つでした。14 頁の 11～14 行目が女君の着こなしの描写となっていますが、そこに「桜襲」「樺桜」「花桜」「柳」などの語が出てくることに注意して下さい。

問五（内容説明）

内容説明の問題は、傍線部の現代語訳からはじめます。傍線部④を現代語訳すると、「絵に心を傾けているけれども、やはり扇を手放さない用心は、緩みそうにもない」などとなります。「心を入れる」「用心」「ゆるぶ」などの古語の訳に特に注意して下さい。その上で、「扇」が貴族女性が顔を隠すのによく用いる物であること、人にみだりに姿や顔をみせないようにするのが貴族女性の嗜みであることに注意して、現代語訳した成果をわかりやすく言い換えていきます。

問六（現代語訳）

古語を一語一語現代語に置き換えていく逐語訳が基本だと考えて下さい。「え」は打消表現（この場合は「ざり」）と呼応して不可能を表す副詞。「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形。「けむ」は過去推量の助動詞「けむ」の終止形で「～（し）ただろう」などと訳します。「これ」の指示内容については、このあたりが長恨歌の後（世界三大美人の一人にも数えられる楊貴妃のこと）と女君とを比較して、女君の美しさを強調している部分であることを注意して考えます。

問七（文学史）

物語の文学史についての理解を問う問題です。作り物語の文学史は、『竹取物語』（「物語の出で来はじめの祖（おや）」と称される）などを起源とし、『うつほ物語』『落窪物語』などを経て次第に写実性を強め、『源氏物語』に至って完成を見る。その後、『狭衣物語』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』など、『源氏物語』の大きな影響を受けた物語が数多く書かれるようになっていく、というのが一般的な捉え方です。イの『伊勢物語』は十世紀前半に成立した作者不明の歌物語、ハの『とはずがたり』十三世紀後半に後深草院二条（久我雅忠女）によって表された日記です。文学史については時代、作者、ジャンルを覚えるだけでなく、年表などで作品相互の前後関係なども学習しておきましょう。

【解答例】

一

問一 社会化

問二 A＝イ B＝ハ C＝ロ D＝ニ E＝ハ

問三 産業化に伴って高齢者扶養を国家や企業が担うことになり、子供の教育も老後への先行投資ではなくなり、家族が結束する理由が生活という実地的なものではなくなったから。(79 字)

問四 イ

問五 金銭的コスト

問六 X＝ロ Y＝イ

問七 現代社会を生きる個々人は子どもがいるいないにかかわらず福祉制度によって支えられており、子育てはその福祉社会の維持に不可欠な将来の構成員を養成することであるから。
(80 字)

問八 イ＝○ ロ＝× ハ＝○ ニ＝× ホ＝×

問九 a＝あしかせ(あしがせ) b＝累進 c＝賄

二一A

問一 従来、機械やITを使う際、目的設定と材料提供とプロセス設計は人間の役割だったが、そのうちのプロセス設計の役割をAIが担えるようになった。(68 字)

問二 AIが人間の画像認識能力を上回る成果を挙げたこと。(25 字)

問三 A＝イ B＝ニ C＝ハ D＝ロ

問四 トライアル・アンド・エラー(トライ・アンド・エラー)

問五 イ＝× ロ＝○ ハ＝○ ニ＝×

問六 a＝膨大(厩大) b＝称讃(称赞・賞讃・賞賛)

【解説】

□〈出典〉 中澤渉『日本の公教育』（2018 年中公新書）

〈問題文〉 子どもをめぐる社会的対立を論じた文章。福祉制度が整った現代では〈将来親の面倒をみてもらうために子どもを育てる〉必要性が薄れ、子どもを持つことは個人の自由な選択となったため、子どものいない人や私立学校に通わせる人は税金を子育て政策に投入することに不満を抱くが、一方で福祉制度を支えるには社会に一定数の（将来働き手となる）子どもが必要であり、ここに子育てをめぐる議論の難しさがある、と述べています。

〈設問〉 問一 16 段落に「高齢者介護なども徐々に社会化され」という傍線①前後と重なる表現があります。

問二 Aは同段落末「教育投資」などから。Bは直前「意欲」を起こさせるような刺激・誘因の意のハ「インセンティブ」。Cは後に続く「家族として望む……方針と……社会全体の価値観が異なることもある」（次段落）をはじめとする論旨から。ロ「齟齬」とは〈くいちがい〉のこと。Dは、「納めている税額は多」い「高所得層」は「税金で運営されている」（前段落）「公立学校の運営費に」＝「貢献」しているということ。Eは、子どもを産み育てることがかつてのように「必要性」のためではなくなつたというのですから、「子育てにかかる費用」も個々のカップルにとって（いわば趣味や楽しみのように）ハ「消費」とみなされるようになった、という文脈。

問三 2～5 段落の内容を論理的順序に沿って再構成します。「高齢者扶養」は（子どもではなく）「国家」や「企業」が担うようになった（3 段落）ので、〈親が子を育て、親が老いたら子が支える〉といった関係（2 段落）の「必要」「必然性」が「失われ」（傍線②直前）、（そうした実利的必要性に）「代わって」「愛情」が家族の「つながり」の軸だと考えられるようになった、という文脈です。

問四 〈馬に拍車を当てて早く進ませる〉ことから〈力を加えて物事の進行を速める〉意の慣用句になったものの。

問五 「費用」＝「コスト」。設問指定は〈六字以内〉でなく「六字」（ちょうど）です。

問六 Xは直前「普遍性」（＝すべてのものに共通すること）に沿うもの。Yは直前「個人を支える」「社会全体の制度」の存続のために「原資となる年金・保険料を収める現役世代が必要となる」（15 段落）とあることから。

問七 「だから」に着目し前段落までの論旨をまとめます。「老後の面倒」を「社会的に支える」「福祉」（前段落）は「現役世代によって支えられ」るのだから、「子育て」は「将来のセーフティ・ネットを支える社会的構成員を育て」ること（21 段落）であって、「単なる個人的選択や楽しみ」とはいえない（傍線⑤）という論理です。

問八 イは18～23段落などに、ハは12・13段落などに合致。ロ「公的制度」が「不要になった」のではない(14・15段落など)。ニ「テクノロジーが進歩した」ことは述べられていますが、ニ「……から、学校教育のカリキュラムの内容が……」とはいわれていません。本文には「やむを得なかった人もあれば、自ら進んで決断した人もあろう」(14段落)とあって、ホ「子どもが欲しいのに出産を躊躇したカップル」だけだとは述べられていません。

二A 〈出典〉 波頭亮『文学部の逆襲』(2021年ちくま新書)

〈問題文〉 AIの発展が社会にもたらす影響について論じた文章。従来は人間が「お膳立て」しなければならなかった「プロセス設計」を担えるようになったことでAIが本格的に人間を代替できるようになり、人間の労働時間が減り自由度が増して社会に大きな変化がもたらされる可能性がある、と述べています。

〈設問〉 問一 「従来」(設問指定)は、傍線①前部「目的と材料とプロセス設計」を「人間が……お膳立て」しなければならないことが「完全自動化……のボトルネック(妨げ・障害)」となっていたが、その3つのうち「プロセス設計の役割をAI自身に担わせることが可能になった」(4段落)とあります。

問二 8段落に「この時をもって、AIが人間を代替できるレベルにまで達したと……」とあるのをおさえます。

問三 Aは「AIシステム」に「医者の……診断」をイ「模倣」させようとした、という文脈。Bは前段落「人間が設計することなく」などから。Cは「視覚情報」すなわち前段落「画像」の「判別」専門のAIだったということ。D直後「旅行や音楽……」は前の「心理的満足や社会的満足」といった「欲求やニーズ」に対応する動向。

問四 「試行錯誤」は〈試み(トライ)と失敗(エラー)を繰り返しながら次第に目的に近づいていく〉意。

問五 ロは5・6段落に、ハは11段落に合致。イ「目的の選定」は「……どのデータを活用するのかを決めること」ではなく『「企業の成長予測を行う」ため』(1段落)の方に当たります。ニ「多くのモノを家族と共有することで……豊かさを実感」とは述べられていません。

■令和 7(2025)年度学習院女子大学一般選抜・古文 解答例・解説＜B方式＞

【解答例】二-B（選択問題 古文）

問一 A＝ハ B＝ロ C＝ニ

問二 ニ

問三 天竺の人

問四 許す

問五 親の元へ戻らないでいるわけにもいかないので

問六 助けられた恩を返そうとした亀が、船が転覆して川に落ちた錢を拾って、助けた人が戻る前に人の姿になって親の元に届けたから。（五九字）

問七 イ＝× ロ＝○ ハ＝×

問八 ハ

【解説】

〈出典〉 『宇治拾遺物語』（中世の説話）

『宇治拾遺物語』は鎌倉時代初期に成立した編者未詳の説話集で、出題したのは、巻十三の「亀を買ひて放つ事」の全文です。殺されようとしていた亀を憐れんだ人が、たまたま親から預かっていた大切な金銭を代価として亀を救ってやったが、亀のおかげで結局その金銭が戻ってきたという、「動物報恩譚」に属する話です。おとぎ話の浦島太郎の話に近く、出来事中心の文章であることも手伝って、かなり取り組みやすい文章といえてよいでしょう。

〈設問〉

問一（主体判定）

- A 「見やる」は「遠くを眺める・その方向を見る」という意味です。「川のはた（＝川のほとり）」から「舟のかた（＝舟の方）」を見たのは、「天竺の人」から「錢五十貫」を持たされた「子」しか考えられません。
- B 波線部B「死にぬ」の文中の主語は、「ここに亀売りつる人は」です。「ここに亀売りつる人」は、「舟に乗りたる人」と同一人物です。
- C 「やりける」は「送った」という意味で、その文中の主語は、「買ひて放しつる亀の」（「の」は主格の格助詞）です。

問二（語句の意味）

「あながちなり」は、自分を抑えられず、やむにやまれない様子を表す形容動詞で、「強引だ・無理やりだ・いちずだ・ひたむきだ」などと訳します。「あながちに＋打消」の形で、部分否定（「必ずしも～ない」などと訳す）となることもあることも知っておきましょう。直後の「手をする」は、切実な依頼や謝罪をするときのしぐさです。

問三（人物判定）

本文中で親子関係が認められるのは、1行目の「天竺の人」と「子」との間だけです。「子」は財宝を買うための代金として錢五十貫を持たされました。それを「亀に替へ」てその亀を放したわけですから、結局は錢五十貫を無駄にしてしまったことになります。「親」＝「天竺の人」は当然ひどく腹を立てることが予想されます。

問四（文脈判定）

二重傍線部の「放つ」（「放ち」はその連用形）は「放す・逃がす」という意味です。「亀を逃がす」という意味になっていると推測される箇所を文中から探してみましょう。動詞「許す」は形容詞「ゆるし（緩し）」と同根で、「緩める」という意味から、「放す・逃がす」という意味が派生しました。

問五（現代語訳）

「親の元へ行か」の部分には大事なポイントは含まれておらず、特に置き換えの必要はありません。「で」は未然形に接続して打消を含んだ単純な接続を表す接続助詞で、「～（し）ないで」などと訳します。「べき」は助動詞「べし」の連体形で、打消文中に用いられた場合は可能（「～（する）ことができそうもない」などと訳す）で訳すとうまくいくことが多いようです。「ね」は未然形に接続しているので、打消の助動詞「ず」の已然形。完了の助動詞「ぬ」などと間違えないように注意して下さい。「ば」は已然形に接続して順接の確定条件を表す接続助詞です。この場合は「～ので・～から」と訳せばよいでしょう。

問六（理由説明）

理由説明の問題は、本文中に理由を具体的に述べた箇所があるのがふつうなので、その箇所を探します。「この銭が親のところにある理由」、「それが濡れている理由」が述べられていると考えられるのは最後の段落（「はや、～やりけるなり」の部分）です。この部分を訳して整えれば答えになります。

問七（内容合致）

選択肢の内容を、対応する本文中の箇所と照合しながら正誤を判定していきます。イは本文の第1段落の内容と対応しています。亀を持っていたお金で助けたのは「天竺の人」ではなく、その子供でした。ロは9～10行目と対応しています。本文と矛盾する内容は含まれていません。ハについては、子供から「銭五十貫が宝を買うために使われなかった」ことを聞いた「親」＝「天竺の人」の反応は、本文の第2段落に述べられていますが、どこにも「大変腹を立てた」ことは述べられていません。

問八（文学史）

『宇治拾遺物語』が鎌倉時代初期に成立したことは〈出典〉に述べたとおり。イ『今昔物語集』は平安時代後期に成立した編者不明の説話集、ロ『大和物語』は平安時代の十世紀半ばごろに成立した作者未詳の歌物語、ハ『沙石集』は鎌倉時代後期に無住道暁によって編まれた仏教説話集、ニ『日本霊異記』は平安時代初期に景戒によって編まれた仏教説話集です。

【解答例】

一

問一 A＝ニ B＝イ C＝ロ

問二 水につかるのが怖い状態から身体を水にまかせるコツをつかんだ状態への移行のように、運動の手順が自己の身体に定着すること。(59 字)

問三 それまでできなかった何らかの身体運動ができるようになる運動学習は、「生きられた身体」としての自己がその行為の主体となる過程そのものだから。(69 字)

問四 (そこから) あらゆる知覚が生じるパースペクティブの原点 (21 字 (冒頭「そこから」がなくても可)・25 字)

問五 経験の構成要素のうち、その時々意識の対象として焦点化されているもの。(35 字)

問六 イ＝× ロ＝○ ハ＝○ ニ＝×

問七 a＝膝 b＝裁縫 c＝明瞭(明亮)※

※大問一・問七・波線 c について、大問二中で示した選択肢の中に解答となる漢字が記載されていたため、当該設問について、受験生全員の解答を正解としました。

二

問一 2つの対象の様々な相違のうち、どの点が種を分ける要素でどの点が同種内の個体差なのかは別のものと比べないとわからないから。(60 字)

問二 ①＝ハ ②＝ハ ③＝ニ ④＝ロ

問三 ⊖＝経験(記憶・体験・情報 など) ⊕＝新種

問四 I＝ハ II＝ロ III＝イ IV＝ハ

問五 ロ

問六 a＝既知 b＝あんど c＝掲載

【解説】

□〈出典〉 田中彰吾『自己と他者 身体のパースペクティヴから』（2022年東京大学出版会）

〈問題文〉 身体のある方について述べた文章。単なる「物体」ではない「生きられた身体」の諸相を、運動学習、知覚や経験の主体としての身体、身体と対象・環境との〈図と地の反転〉などのさまざまな観点から述べています。

〈設問〉 問一 Aは前の「楽器の演奏……すべて運動学習として位置づけられる」が後の「誰もが何らかの運動学習を日常生活のさまざまな場面で経験していると言える」ことの理由になっています。Bは前の「身体は経験の背景に退いて」や5段落末「意識にのぼらない」から。C直前「指先の……」は、前の「私が私の身体を知覚する……対象として行為する場合」の例。ハ「経験と知覚の狭間」ではなく〈知覚しながら行為している〉ところです。

問二 直前「身体運動の手順が……定着」とは「コツをつか」んだ状態だとおさえ、設問の指定に従い1・2段落の例を〈どんな状態から→どんな「コツをつか」んだ状態になったのか〉という形でまとめます。

問三 傍線②「生きられた身体」は次段落に「一人称の『私』の観点から経験されている身体」「何よりもまず、行為と知覚の主体」と説明されています。傍線②「運動学習」によって「誕生時……には不可能」だった「動作」が「運動学習によって……可能になる」ことはまさに、自分（私）がその「行為……の主体」となることです。

問四 傍線③の「それ」は前の「私の身体」。つまり傍線③は〈私の身体によって対象が存在する、そういう性質を持つものが「私の身体」だ〉という意であり、これは前段落「身体は……行為や知覚の対象を浮かび上げらせる当のもの」（例えば〈目（私の身体）があるから対象が見える〉といったこと）に当たります。これに近い内容で指定字数にふさわしい表現は7段落「そこからあらゆる知覚が生じるパースペクティヴの原点」です。

問五 直後から、「図」は「前景化して現れてくる」もの、「地」はそのとき「背景化し」ているもの。同段落初めの例でいえば「自己の身体が……前景化」とは〈頭や歯が痛いときは痛み感覚に気を取られている〉ということ。つまり、その時々で〈中心的に意識している〉ものが「前景化して」いるもの＝「図」だということです。

問六 ロは4段落に、ハは6段落「対象になることがなく」8段落「対象として完全な姿で現れることはない」に合致。イ「運動学習の本質」は「コツをつかむ」ことであって、「恐怖をのりこえる」ことが必須条件というわけではありません（例えば「楽器の演奏……」（3段落）などには必要ないでしょう）。ニ「対象……に集中するあまりに……眼球の動きが気になる」は〈一方が図になるとときには他方は地になる〉というニ「反転」とは違います。

□〈出典〉 岡西政典『生物を分けると世界が分かる』（2022 年講談社）

〈問題文〉 生物の分類について論じた文章。2つのものを分類するためには比較のための手がかりとなる第3のものが必要であり、ある点での違いに着目して複数のものを2つに「分ける」ことは、同時に、その点では違わないものを同じものとして「まとめる」ことでもある、と述べています。

〈設問〉 問一 二重傍線の「2つだけしかない状況」とは、6段落「生まれて初めてアメフトとバスケのボールを見た」（それを見分けるための手がかりになる「もう一つ」（10 段落）がまだない）状態。7段落には「形は違う」「重さも弾力も違う」が「色は茶色で似ている」「どちらも（楕）円形」とあって、それらさまざまな特徴のどれが「2つ」を「はっきりと分ける」決め手なのかがわからない、という状態であることがつかめます。

問二 ③のニ「歴然」は〈はっきりしている・明白だ〉の意。④のロ「泰斗」は〈その道で最も権威ある人〉の意。

問三 空欄㊦は直前「そのような」が指す「何度も……目にしている」のような過去の「経験」「記憶」。同趣旨の言葉は広く認められるでしょう。空欄㊦は波線部 a の段落の「C」の「腕針の数がもし2本以上であれば……Xは既知のいかなるヒメモヅル属の種とも異なる^{新種}であると判断できる」をうけた箇所です。

問四 I・IIは傍線③の段落、IIIは終わってから二つめの段落、IVは終わってから三つめの段落を、それぞれ参照。

問五 最後の二段落に、「CとA」は「同種」、「AとX」は「はっきりと区別」とあります。ハ「属」は本文に「種の1つ上の分類のカテゴリー」とあり、Xは「ヒメモヅル属」の中の「腕針を1本しか持たない種」とありますので、ハ「Xは別の属」は誤りです。

■令和7（2025）年度学習院女子大学一般選抜・現代文 出題傾向と学習アドバイス

【出題傾向】

〈問題文〉

〔過去3年間の出典〕（ ）内は出題分野

2023

- A 桑子敏雄『何のための「教養」か』（社会・科学） 安藤宏『「私」をつくる』（文化）
B 品川哲彦『倫理学入門』（社会・哲学）
D・E・ブラウン／鈴木光太郎・中村潔訳『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』（科学・文化）

2024

- A 白井恭弘『ことばの力学』（文化・社会） 香室結美『流行』（文化・社会）
B 中村雄二郎『術語集Ⅱ』（文化・社会） 鈴木貴之『人工知能に関する2つの見方』（科学・哲学）

2025

- A 戸谷洋志『「親ガチャ」と自己責任論』（社会・文化） D.L.エヴェレット／松浦俊輔訳『言語の起源』（文化・言語）
B 中澤渉『日本の公教育』（社会・教育） 波頭亮『文学部の逆襲』（社会・科学）
C 田中彰吾『自己と他者 身体のパースペクティブから』（心理・哲学） 岡西政典『生物を分けると世界が分かる』（科学・文化）

問題文は、おおむね評論二題の出題。社会・文化論が中心ですが、具体的なテーマとしては様々な話題が出題されますので、〈出題されそうな文章を読んでおく〉といった学習は（ほとんど当たりそうになく）効果的とはいえません。内容的にも、〈見慣れた話題〉〈一般的通念や常識をなぞるような論〉よりも〈新しい問題意識に基づく話題を取り上げた文章〉〈常識的通念をくつがえす新しい視点による論〉が多いので、〈見慣れない話題の文章でも、その場で筆者の叙述をきちんと追って、「この人はこういう意見なのか」というふうに理解していく〉正統的な読解力を養うことが必要です。

分量的には、A・B・Cともに二題合計で4500～7500字くらい。私立大学としては記述設問の量が多いこともあり、かなり手応えのある分量だといえます。しかし、文章自体は、論理構造が明快で、論の運びにも無理のないものが多く、文章読解の方法をきちんと身につければ読み解けるはずです。

〈設問〉

〔過去3年間の設問形式〕 2題合計

2023

- A 空欄補充6 傍線部説明4 論旨把握1 内容合致2 漢字・語意3
B 空欄補充6 傍線部説明5 論旨把握1 ポイント要約1 指示語1 内容合致1 漢字1

2024

- A 空欄補充4 傍線部説明6 論旨把握1 内容合致2 漢字2
B 空欄補充3 脱文挿入1 傍線部説明4 内容合致2 漢字2

2025

- A 空欄補充5 脱文挿入1 傍線部説明3 論旨把握3 内容合致1 漢字・語意2
B 空欄補充4 傍線部説明3 論旨把握2 内容合致2 漢字・語意4
C 空欄補充4 傍線部説明5 内容合致1 漢字・語意3

設問形式は、空欄補充・傍線部説明・内容合致・漢字を中心とした知識設問という、私立大学としては標準的な形。国語に関する知識と文章読解力、部分の読解と全体の把握といった力をバランスよく問う設問構成で、現代文の力が総合的に試される出題だといえます。難易度も標準的で、奇をてらった問いや、解答不能なほどに難解な問いは出題されません。ただし、一つの大問中に、比較的取り組みやすい設問とやや手ごわい設問とが含まれていますので、〈制限時間内に合格ラインの得点を確保する〉ためには、迷わされそうな設問は後回しにし、確実に正解できる設問を取りこぼしのないように確実におさえる、といった時間配分の工夫も必要です。

漢字は読み・書きともに出題されます。漢字練習帳の〈頻出漢字〉の項に掲げられているものを中心に練習しておきましょう。また、漢字の「部首」を問う設問や、語意、文法、文学史などが問われる場合もあります。基本的なものについては、「国語便覧」や国語知識に関する問題集などで確認しておきたいところです。漢字をはじめ国語常識の設問では、まれに難しいものが出題される場合もありますが、そうしたものはほとんどの人が正解できない（つまり、その設問では得点差がつかない）のであまり気にせず、頻出のものをきちんと身につけておくことが大切です。

[過去3年間の解答形式] 2題合計

- 2023A 選択式9 抜き出し式1 記述式3 (200字・70字・2字) 文学史1 漢字2
B 選択式7 抜き出し式3 記述式5 (60字・指定なし・30字×3・10字・100字) 漢字1
- 2024A 選択式8 抜き出し式3 記述式2 (200字・80字) 漢字2
B 選択式5 抜き出し式2 記述式3 (120字・30字・60字) 漢字2
- 2025A 選択式8 抜き出し式3 記述式3 (100字・50字・90字) 漢字1
B 選択式6 抜き出し式2 記述式5 (80字・80字・70字・25字・指定なし) 漢字2
C 選択式5 抜き出し式2 記述式4 (60字・70字・35字・60字) 漢字2

最大の特徴は、記述設問の分量がかなり多い点です。とはいえ、設問の作り方としては、問題文の正確な理解に基づいて、傍線部・設問文から設問要求を的確におさえ、それに沿って本文中の表現をまとめるという、オーソドックスな記述説明設問が多いので、記述力養成の練習をきちんと積んだ人は確実に得点を見込むことができます。私立大学の受験生には記述設問が苦手な人が少なくないので、その練習をきちんと積んでおくことが、他の受験生に差をつけるポイントになるでしょう。また近年では、100字・200字といった長字数の記述の出題が増えて来ています。これについては、本文の広い範囲や全体を要約する練習を重ねることが効果的です。

【学習アドバイス】

〈基礎となる語彙力を固める〉

先に見たように評論を中心とした出題なので、いわゆる〈評論用語〉の語彙力を強化することが第一です。〈普遍—特殊〉〈絶対—相対〉〈アイデンティティ（自己同一性）〉〈メディア（媒介となるもの全般）〉といった語は、〈何となくわかっているようで、じつは正確な意味が理解できていない〉人も少なくないものと思われます。いわゆる〈現代文キー・ワード集〉のような、漢語やカタカナ語の抽象語を集めた参考書で、正確な語意を理解しておくようにしましょう。

漢字・四字熟語といった国語に関する知識も、設問で問われるだけでなく、文章読解の基礎となる力にもなるので、基礎的なものはしっかり身につけておきたいところです。

〈文章読解の方法を身につける〉

出題される文章のジャンルはさまざまで、多種多様な話題・論点の文章が出題され、また一般的通念をくつがえすような論旨の文章も少なくありません。したがって、いわゆる〈入試頻出〉テーマの文章の内容を覚えておいて〈見たことのある文章だから理解できる〉といったことに期待するような学習のしかたは、空振りに終わる可能性が高いといえます。論説文として正統的な書き方の文章が出題されていますので、文章読解の方法をきちんと身につけ、〈その場で筆者の叙述を追ってきちんと理解する〉力をつちかひましょう。

具体的には、参考書や問題集などの評論文を、〈同内容の繰り返し〉〈対比関係〉を意識しつつ、〈ここからここまではAという話の繰り返し〉〈ここからここまではBという話の繰り返し〉で、これは先のAと対比されている〉といったぐあいに、論旨を整理しながら読む練習を繰り返すことです。はじめのうちはゆっくり時間をかけて読むとよいでしょう（各部分の論旨を20～30字程度でメモしながら読み進めるなどすれば、記述解答の力をつける予備練習にもなります）。そのような練習を重ねて、文章の骨格をつかみながら読むやり方に慣れていけば、次第に読むスピードも上がってくるものです。

〈設問解答の練習をする〉

設問は、基本的には私立大学の標準的な形式なので、私大型の標準レベルの問題集で設問解答の演習を重ねていけばよいでしょう。

設問解答に当たっても、問題文の読解の段階でつかんでおいた〈同内容の繰り返し〉〈対比関係〉などが第一の手がかりになります。〈この設問箇所ですべて述べられていることは、内容的に前のこの部分の繰り返しだから、そこがヒントになる〉とか、〈この選択肢は、設問箇所の内容とは対比されている（反対側の）内容だから×〉といった形で解答できる設問が多い、ということです。

例えば、同じ空欄補充設問でも、空欄前後の意味上のつながりがヒントになっている〈語彙力型〉の問いと、問題文の他の箇所との同内容・対比関係などがヒントになっている〈読解力型〉の問いがあるので、意識しながら練習を重ねるとよいでしょう。傍線部説明の場合には、まず傍線部・設問文から〈何について答えるのか〉をしっかりとつかみ、そのことについて説明している叙述を本文中できちんと確認する、という解答手順を反復練習しましょう。長い選択肢については、全体としての方向性でまず判断し、それでも解答がしぼりきれない場合には、選択肢中のある部分（要素）に誤りがしかけられていないか、といった目でチェックし直す、という姿勢も持ちたいところです。

記述設問は、きちんと準備した人としらない人とで大きく差がつくところなので、標準的なレベルの問題集で練習を重ねましょう。多くの場合、問題文読解の段階で整理しておいた〈各部分の論旨の中心点〉をもとに答える設問になっていますので、①まず傍線部・設問文から〈これとこれとこれについて問われている〉というふうに、要求されている要素を的確に把握し、②それぞれについて、本文のどの部分でどのように説明されていたか、を確認して、③必要な解答要素の見当をつけ（あるいは簡単にメモし）た上で、字数内にまとめる、という練習を繰り返しましょう。

〈過去問演習で仕上げる〉

出題形式は一定なので、過去問が最良の演習問題となります。直前期には、以上で述べたようなことに注意しながら、本番同様に時間をはかって過去問を解くことで、最後の仕上げをしていきましょう。

■令和7（2025）年度学習院女子大学一般選抜・古文 出題傾向と学習アドバイス

【出題傾向】

中古、中世の日記、随筆、物語、説話などを中心に出题しています。2025年度は中古の物語『夜の寝覚』と中世の説話『宇治拾遺物語』からの出題で、その前は、『更級日記』『宇治拾遺物語』『徒然草』『伊勢物語』などから出題しています。素材となる文章は、基本知識の習熟度を確認する設問や、理由説明・内容説明・表現説明などの応用力を問うやや難易度の高い設問を作れる箇所が含まれているかどうかを考慮して選んでいます。また、受験生の人間・社会や古典への関心を測れるような興味深い素材を選んでいます。全体としては受験生に適切な難易度と判断されるレベルの文章を選んでいます。設問を付す箇所は、語彙・語法に関して基本的なものから難易度の高いものまで含まれるように配慮してあります。

設問については、読解の要となる箇所を外さず、多角的に受験生の学力を測れるように設けてあります。記述式の現代語訳の問題または記述式の説明型の問題（内容説明・心情説明・理由説明など）が最低一題は出題されます。その他、主体判定・人物判定、空所補充、文法識別、文学史もしばしば出題されます。また、和歌や、和歌から派生した文学形式である連歌に関する問題を多く出題しています。今後も注意してほしい分野です。

【学習アドバイス】

付け焼き刃では対応できない設問が多いので、普段からきちんとした学習習慣を身につけて下さい。特に、①現代語訳を書く練習、②文脈から内容を推理する練習、③理由や心情をまとめる練習などを積むことが大切です。

現代語訳の問題への対策としては、普段からきちんと書くようにすることです。それも、なんとなく文脈から意味を推測するのではなく、重要古語はもちろん、副詞の呼応、敬語、付属語などにも配慮して、一語一語現代語に置き換えるよう心掛けて下さい。それが、文法識別問題などへの対策にもなり、読解力の向上にもつながります。

説明型の問題への対策としては、本文の記述に即して傍線部の内容や理由を説明させられることが多いので、過去問などで練習するのがよいでしょう。

空所補充の問題は、文脈を読み取る力、語彙力の充実を目指しましょう。

文学史に関しては、普段の学習の中で触れた有名作品の作者・時代・ジャンルをおさえておくことです。選択肢には、受験生が普通は見かけないような作品も含まれているかもしれませんが、有名作品が分かっているれば答えが出るように問題を作っているはずで

和歌についても普段からきちんとした方法論にしたがって読む練習をしておいた方がよいでしょう。和歌が詠まれた状況をおさえ、句切れを探して和歌の構造をつかんだ上で、きちんと現代語訳するというのが基本です。難しく考え過ぎる必要はありません。